

セッション B 戦後思想再考——戦後日本思想におけるサルトルとフランクフルト学派

世話人: 中野敏男(無所属)

司会者: 川本隆史(国際基督教大学)

報告者: 竹本研史(法政大学) 初見基(日本大学)

討論者: 三島憲一(無所属)

セッション「戦後思想再考」は、2010年10月の第35回大会(神奈川大学横浜キャンパス)このかた、ゆるやかに連続する個別テーマを設定して、日本の戦後思想の特質を協働探究し続けている。9回目に当たる今回は、前年度セッションの「戦後日本のヴェーバーとハイデガーの受容」を受けるかたちで、戦後思想におけるサルトルとフランクフルト学派の受容を検討した。

当日は、50名を超える参加者(熱心なリピーターを含む)を得て、二つの報告とコメント、さらにフロアとの質疑応答でもってセッションを運営した。司会者のタイムキーピングの不手際により、質疑応答にじゅうぶんな時間を割けなかった憾みは残るものの、そこでの意見交換はこの連続セッションの今後の展開に生かしていきたいと考えている。

冒頭、戦後思想にサルトルが登場したシーンを印象深く綴った清水幾太郎のエッセイ「私たちのサルトル」(初出『文学』1963年3月号/同『現代の経験』現代思潮社、1963年5月に再録)の一部を司会者が紹介して、報告・コメントに入った。

以下に各パートの概要を併記しておく。

1 竹本報告「サルトルの日本受容——加藤周一と鈴木道彦による「特異的普遍」のアンガージュマン」

竹本は、加藤周一と鈴木道彦の2人が、ともにサルトルの「特異的普遍」という概念を通じて、1人の人間が歴史のただなかで生きるかけがえのない存在として自らの置かれた状況をどのように引き受けるかという課題に対し、各自がどのように直面したかについて報告した。

加藤は、サルトルが人間を、個人のかげがえのなさや歴史との交点におきつつも、

「特異性」と「普遍性」とをいかに統合するかに腐心していた点を踏まえつつ、彼がサルトルに従いながら、支配階級によって目的を課されたという点であくまで特異な立場に立脚した「知的技術者」が、一方で「普遍性」を目指すという矛盾を自覚することが「知識人」になるための条件だと考えていたことを指摘した。

他方で鈴木は、サルトルの「特異的普遍」というあり方を「人間」のありようとして捉えつつ、フランス留学中に FLN の支持者・活動家らと接触をもつことになった結果、フランスとアルジェリアとの関係を、日本と朝鮮半島との関係を類比させることで「民族責任」を自覚し、帰国後、金嬉老の裁判支援闘争など、在日の問題などに対して積極的にコミットメントすることになったことを明らかにした。

2 初見報告「啓蒙への回帰？ 西ドイツにおけるアドルノの一面」

初見報告では、サルトルとは異なったアドルノにおける「アンガージュマン」の一側面が指摘された。

戦後早々から邦訳の出されていたサルトルに対して、アドルノ翻訳が本格化するのには 1980 年代以降であり、理性批判、近代批判の契機やペシミスティックな面、さらには美的領域における救済といった観点が強調された。その「静観的」なアドルノ像は、ラッセル法廷などでベトナム戦争を糾弾したサルトルと並べるとき、対照をなしているように見える。

ただ、戦後再建された社会研究所が最初に行った社会調査を分析したアドルノは、戦後ドイツ人がナチ時代の犯罪に対して「否認」の姿勢を見せるにとどまらず、反ユダヤ主義的心性すら根強くもっていることを指摘、これを踏まえた 1959 年の講演「過去の総括、それは何を意味するか」以降の一連の発言では、カント的な意味での個人の自律に力点を置いた議論をしていた。

西ドイツで「過去の克服」がいわば国是となり、それを支える「政治教育」が制度化される過程にあって、「啓蒙」の肯定面を推進するこうしたアドルノなりの現実への参加、アンガージュマンは一定の貢献を果たしていた。

3 三島コメント

サルトルについて軽蔑的に語ることが「パリの雰囲気ではそれが決まり」だと知ったと、田舎からパリに出てきた 70 年代についてサルトル好きだったディディエ・エリボンが書いている。話題になった自伝的現代思想史『ランスへの帰郷』(2009 年[未邦訳])でのことだ。フーコーとデリダ以降、現在までもその状況は続いており、パリのそうしたムードに流されやすい日本のフランス研究者(この点では、思想的に国家の首都が中心ということのないドイツと異なる)のなかで、第一報告者の竹本氏がサルトルについて博士論文(「個人の実践と全体化の論理——ジャン＝ポール・サルトルにおける特異性の位相」)を仕上げたことに、ひとまずは敬意を表したい。また、氏が注目した「特異性」というカテゴリーは、ドイツ語では *Besonderheit* となり、通常「特殊性」と訳されるが、翻訳技術的な問題はさておき、元来は、アリストテレスの「普遍性(一般性)」「特殊性」「個別性」の三つのカテゴリーに遡る。社会思想的には、一般性の個別例でしかない個別性(*Einzelheit*)が、実は(少なくとも当事者から見れば)「特殊性」であることが重要だと思う。その点にサルトルも加藤周一も焦点を合わせ、特異性に——アドルノともどこかで共通しているが——単純ヒューマニズムに埋没しない形で執着したのかと思われる。

【付記】昨年度のセッション事後報告の 3 に記した、徳永恂会員の周到的なコメントはその後大幅に加筆されて、以下の論考へと実っている。

●徳永恂「ヴェーバーとハイデガー」、『思想』2019 年 12 月号、岩波書店。